研究ノート

インダス考古学の現状と課題

上杉 彰紀*

Problems and Perspectives in Indus Archaeology

Akinori UESUGI

本稿は前3千年紀後半を中心とするインダス文明の成立・展開・衰退過程について研究の現状をまとめ、今後の方向性を展望するものである。インダス文明に関する考古学的研究はほぼ100年の歴史をもつが、発掘調査の精度やその成果の公表、基礎データの不十分さ、編年研究の停滞など、多くの課題を抱えている。こうした問題はインダス文明の基本的理解にも大きな弊害を及ぼしており、今後の研究の方向性を見定める上で、そうした問題点を把握・整理しておくことが不可欠である。現有データを時空間軸に沿って整理すると、インダス文明社会は大別4時期に細分が可能であり、前・中期と後期では社会の様相が大きく変化していることが推定可能である。そうした変化は文明社会を構成する地域間関係に起因している可能性が高く、きわめて動的に変化する社会像が浮上する。こうした理解のもとでインダス文明社会の歴史的意義を考察していくことが重要である。

キーワード：インダス文明社会の成立・展開・衰退、前3千年紀、時空間的変化・変異

This paper overviews the current issues of the archaeology of the Indus Valley Civilization (Indus archaeology) and suggests perspectives for the future studies. While Indus archaeology has a history of almost one hundred years there are a number of problems that must be critically overcome, such as the relatively outdated methods of excavation and exploration, limited report publication, lack of basic data and ignorance of establishing a refined chronology. These problems provide tremendous influence on the holistic view of the Indus Valley Civilization. While examining the evidence currently available in terms of tempo-spatial distributions, it can be presumed that Indus urban society exhibits quite different circumstances between the Early-Middle phases and the Late phase. Such a change may have been caused due to the intra-regional relationships between different parts of the Indus region. Future studies must focus on the dynamic nature of the Indus urban society.

Key-words: origin, developments and decline of the Indus Valley Civilization, third millennium BCE, diachronic changes and spatial variations

はじめに

ハラッパー（Harappa）遺跡の発掘調査開始（1920年）を嚆矢とするインダス文明研究が始まって、100年になろうとしている。その間に200ヶ所程度の遺跡の発掘調査が行われ（Uesugi 2018a）、多くの研究が展開されてきた。その中で特にインダス文明の起源に関する理解は研究開始当初に比べて大きく変化することになった。近年は自然科学分析も導入され、研究分野の多岐化・多角化が著しい。しかし、その一方で多くの課題がなかば放棄されるようなかたちで山積みになっているのも事実である。

本稿では、筆者自身の研究を含めた近年の研究動向を中心にインダス考古学（インダス文明の成立・発展・衰退に関わるさまざまな考古学研究を包括する用語としてこの語を用いる）の現状と課題について概観し、今後の研究の展望を示すことを試みる。

1. インダス考古学の一般的課題

インダス考古学全般に共通する課題として、発掘調査の現状、編年研究の欠落、研究の細分化と全体像の把握の難しさ、の3点を挙げることができる。以下、それぞれの問題についてみてみよう。

発掘調査の現状と課題

インダス文明に関係する遺跡の発掘調査はこれまで

*金沢大学国際文化資源学研究センター　Center for Cultural Resource Studies, Kanazawa University

西アジア考古学　第21号　2020年　61-80頁 © 日本西アジア考古学会

に 184 ヶ所の遺跡で実施されている（図 1）（Uesugi 2018a）。現在でも毎年、インド・パキスタンで遺跡の発掘調査が行われているものの、その数は 1 年あたり数遺跡であり、インダス地域（インダス文明が展開したインダス平原、バローチスターン地方、ガッガル地方、グジャラート地方を総称してこの語を用いる）全体からみても、遺跡の発掘件数は著しく限られている。さらに、発掘調査の詳細な報告が刊行されているものは 46 件程度であり、多くは概報レベルでの情報しか得られない。これはインド人、パキスタン人の調査隊に限ったことではなく、欧米の外国調査隊にも共通する状況である。

編年研究の欠落

こうした発掘調査の現状は必然的に研究の質・量にも大きな影響を及ぼしている。概報で公表される基礎データは質・量ともに限界があり、遺跡の全体像の理解を著しく困難なものとしている。特に大きな問題は、遺跡の層序に基づいて出土遺物の時間的変化を考察することが難しいことにあり、遺跡内の出土遺物の時間的変化の総体として組み上げられるべき地域編年、さらにはインダス地域全体の広域編年の構築がほぼ不可能となっている。

遺跡に残された人間活動の痕跡のそれぞれを単位として、その重複関係をもとに遺跡全体の層序が復元的

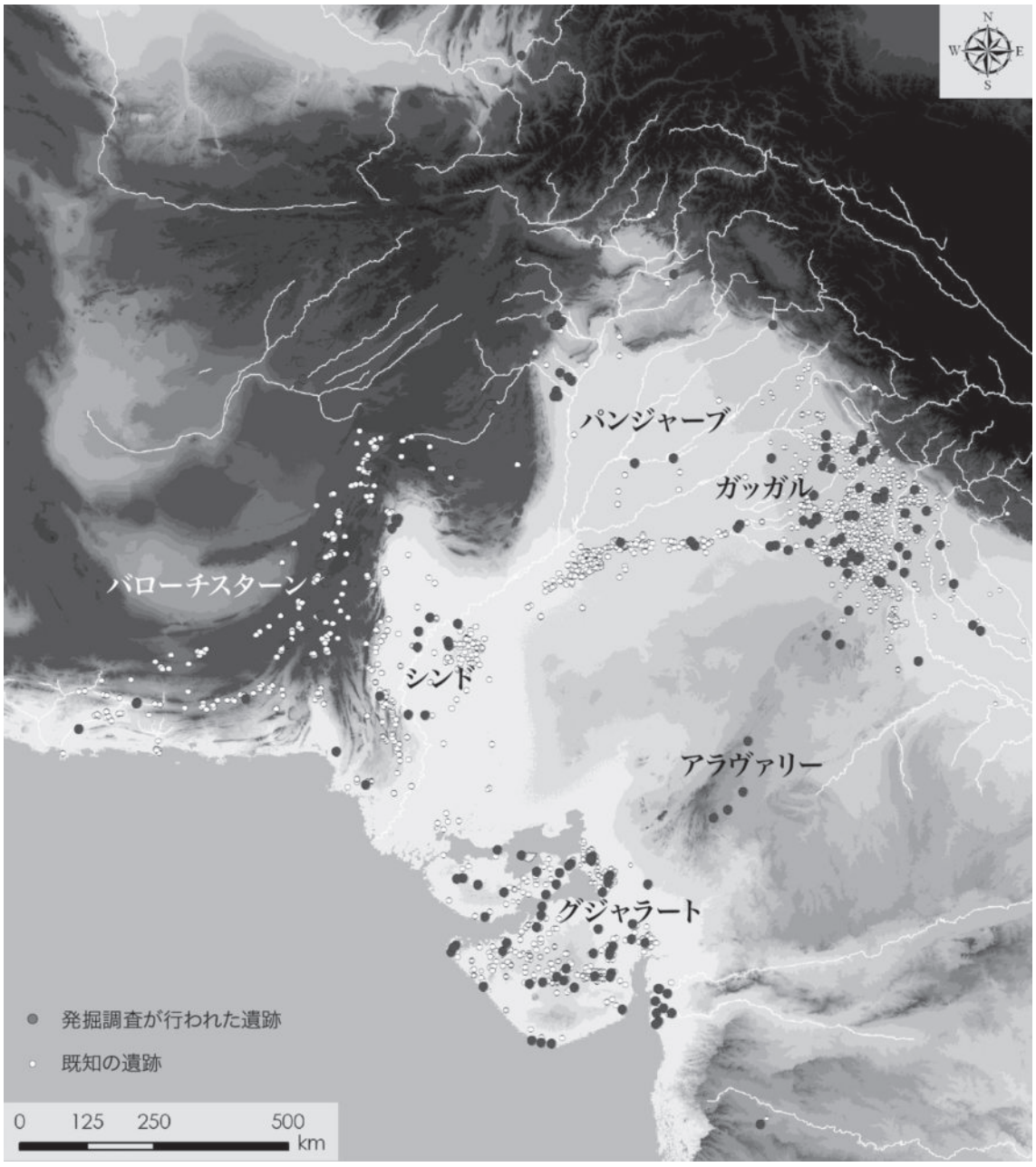

図 1　インダス文明遺跡分布図（Uesugi 2018c より。一部変更）

に理解されるべきであることはいうまでもないが、南アジア考古学では遺構の大きな変化を基準として遺跡の時期区分が設定される（例えば、Kenoyer 1991c; Bisht 1999）。遺構にも当然同一平面形での建て替えや、複数の床面、その他の人間活動の痕跡が関連して細かな時間的変化が内包されるが、そうした変化は捨象されて、大きな遺構変化に基づいた時期区分によって遺物が報告される。結果として、一つの時期区分には数十年から100年以上に及ぶ遺物が混在することになる。こうした状況では遺物、特に普遍的に出土する土器に基づいた編年研究の精度は著しく粗いものとなる。

また、編年の精度が粗いことと関連して、遺跡の中の一つの時期区分を文化的時期区分と対応させて報告するという問題もある。例えばある遺跡の第1期は「インダス文明期」、第2期は「ポスト・インダス文明期」といったような、きわめて大まかな時期区分が設定される傾向にある（例えば、上掲のKenoyer 1991cを参照のこと）。インダス文明期で約700年、ポスト・インダス文明期でも約500年の時間幅があり、現行の遺跡時期区分法ではそれぞれを細分して遺跡の動態を理解することは不可能である。

個別の遺物研究が低調であることもこうした状況と無縁ではない。遺物の形態的・技術的側面に着目する欧米人研究者もいるが（例えば、Kenoyer 1991b, 1997, 2005, 2017; Barthélemy de Saizieu and Bouquillon 1994, 1997, 2000; Vidale 2000など）、インド・パキスタン人研究者の間では遺物に対する関心が低いのが一般的傾向である。やや誇張した表現になるが、諸々の遺物にみられる形態的・技術的差異を時間的変化あるいは空間的変異に結びつけて考察するという視点が欠落しているといわざるを得ない。

研究の細分化と全体像の不明

もう一つの問題は研究の細分化である。ここでいう細分化とは資料・研究対象によるものというよりも、地域的な研究の細分化を示す。インダス文明は南北・東西ともに最大で1800 km、現在の国名でいえばインド、パキスタン、さらにはアフガニスタンの一部を含んでおり、きわめて広大な地域に展開した社会であるが、個々の研究者がカバーする空間的範囲はその一部に限定される。研究者がインドとパキスタンを自由に往来することもままならない状況や、各地の大学で研究活動を行う研究者・学生がその近辺の遺跡に関心が偏る状況はやむを得ないことであるが、結果的に研究対象が地域によって分断され、インダス文明社会全体への関心・理解の醸成が難しくなっている。また、先に述べた報告書が刊行されない状況は研究視点・資料・成果の共有を妨げる結果を引き起こしている。

2　インダス文明の起源をめぐる諸問題

インダス文明の起源については、モヘンジョダロ（Mohenjodaro）遺跡とハラッパー遺跡の発見当初、シュメール文明からの影響を指摘する説があったが（Gadd and Smith 1924; Mackay 1931）、1950～60年代にインド・パキスタン各地でインダス文明期をさかのぼる遺跡が確認されるようになり、インダス地域における社会発展を基盤としてインダス文明が成立したとする考え方が主流となった（Khan 1965）。アムリー（Amri）遺跡、ムンディガク（Mundigak）遺跡、コート・ディジー（Kot Diji）遺跡、サラーイ・コーラー（Sarai Khola）遺跡、カーリーバンガン（Kalibangan）遺跡などが先文明期に位置づけられた遺跡であるが、その中でもモヘンジョダロ遺跡近郊のコート・ディジー遺跡で発見されたコート・ディジー文化がインダス文明（厳密に言えばハラッパー文化）の母体である可能性が注目されるようになった。こうした調査成果を踏まえ、1970年には「初期ハラッパー文化」の概念がM. R. ムガル（Mughal）によって提示された（Mughal 1971）。

この初期ハラッパー文化の概念は、インダス文明の成立過程の理解にとって重要なだけでなく、さらにそれ以前の文化への関心をも含意するものであった。1974～1986年に行われたメヘルガル（Mehrgarh）遺跡の発掘調査では初期ハラッパー文化以前、先土器新石器時代にまで遡る集落址が発見され、少なくともバローチスターン地方中央部のカッチー平原では先土器新石器時代から土器新石器時代、銅石器時代を経て青銅器時代のインダス文明成立直前期までの文化変遷が確認された（Jarrige et al. 1995）。ここに、インダス地域における長期的・連続的な社会＝文化発展が一般的な理解となったのである（Kenoyer 1991a; Shaffer 1993）。

ただし、ここでの問題は新石器時代の遺跡が限られていること、その中でも新石器時代から青銅器時代までの文化変遷が確認できるのがメヘルガル遺跡に限定されていることである。また、メヘルガル遺跡では新石器時代、銅石器時代、青銅器時代で文化内容は大きく変化しており、居住の連続性は確認できるにしてもそれが必ずしも文化の連続性を示すわけではないことがあまり議論されていないことも大きな問題である。特にメヘルガル遺跡の場合は西方（特にイラン高原）と共通する文化要素が少なくとも銅石器時代以降は顕著であり、1920年代のように西方からの直接的影響のもとでインダス文明が成立したとするのは論外としても、西方との交流関係を等閑視することは社会＝文化変化の動態を見失ってしまうことになる。

先文明期におけるインダス地域と西方の関係を示す一例として印章を取り上げると（図2・3）、インダス

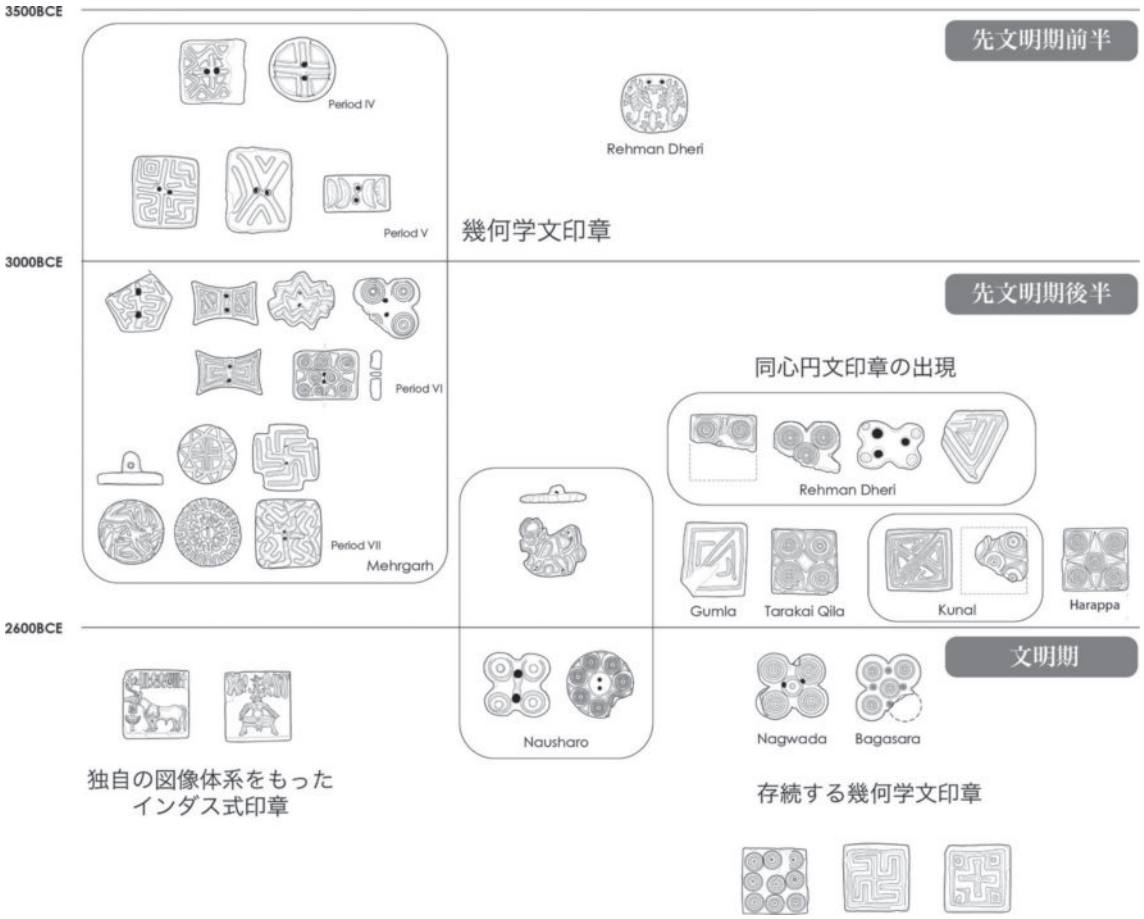

図 2　先インダス文明期からインダス文明期にかけての印章の変遷（Uesugi 2011d より、一部変更）

地域では前 4 千年紀後半のバローチスターン高原東縁部において最古例が出現し、前 3 千年紀前葉には東のパンジャーブ地方やガッガル地方にも広がるようになる（Uesugi 2011d）。この時期の印章をみると、一方の面に幾何学文、もう一方の面に動物文を刻んだ例もあるが、中心をなすのは幾何学文のみを刻んだものである。この幾何学文印章の文様は前 4 千年紀のイラン高原で出土するものと酷似しており（図 3）、この時期のインダス地方がイラン高原の交流ネットワークの東端に組み込まれていたことを示唆している。その一方で、前 3 千年紀前葉の段階には同心円文を文様に組み込んだインダス地域独自と考えられる印章がパンジャーブ地方、ガッガル地方、バローチスターン地方北東部に分布するようになる現象がみられ、これらの地域のつながりが強化されたことを示している。

土器でみると、前 4 千年紀後半までにインダス地域各地で地域様式が出現するが（図 4 左）、概してバローチスターン地方にはイラン高原とのつながりを示す多様な彩文土器が分布するのに対し、インダス平原以東ではイランとの関わりを示さない、彩文の少ない地域型土器様式群が展開する（Uesugi 2011d）。前 3 千年紀前葉になると、パンジャーブ地方、シンド地方を中心にコート・ディジー式土器が出現し、周辺地域にさまざまな形で影響を与えるようになる（Uesugi 2011d）。ガッガル地方ではコート・ディジー式土器の影響を受けた土器が在地のソーティ＝シースワール式土器とともに広く分布し（Uesugi 2011c, 2017）、グジャラート地方では在地のアナルタ式土器が展開しているところに、コート・ディジー式土器を祖形とする土器群が墓の副葬品として出現する（Majumdar 1998–99; Ajithprasad 2002）。バローチスターン地方中央部では在地のメヘルガル VII 期土器とともにコート・ディジー式土器が生産されるという複雑な様相を示す（Pracchia 1985）。バローチスターン地方北東部のバンヌー＝ゴーマル地方では在地の彩文を取り込んだコート・ディジー式土器が主体となる（Dani 1970–71; Durrani 1988; Petrie ed. 2010）。コート・ディジー式土器の影響の受け方は各地で異なっており、コート・ディジー式土器と在地の土器との関係も多様であったと考えられるが、シンド＝パンジャーブ地方を核とするコート・ディジー式土器が周辺地域の土器群と関係を強めることは確かであり、前代の前 4 千年紀後半にはみられなかった現象である。おそらくこうしたコート・ディジー式土器を核とする交流ネット

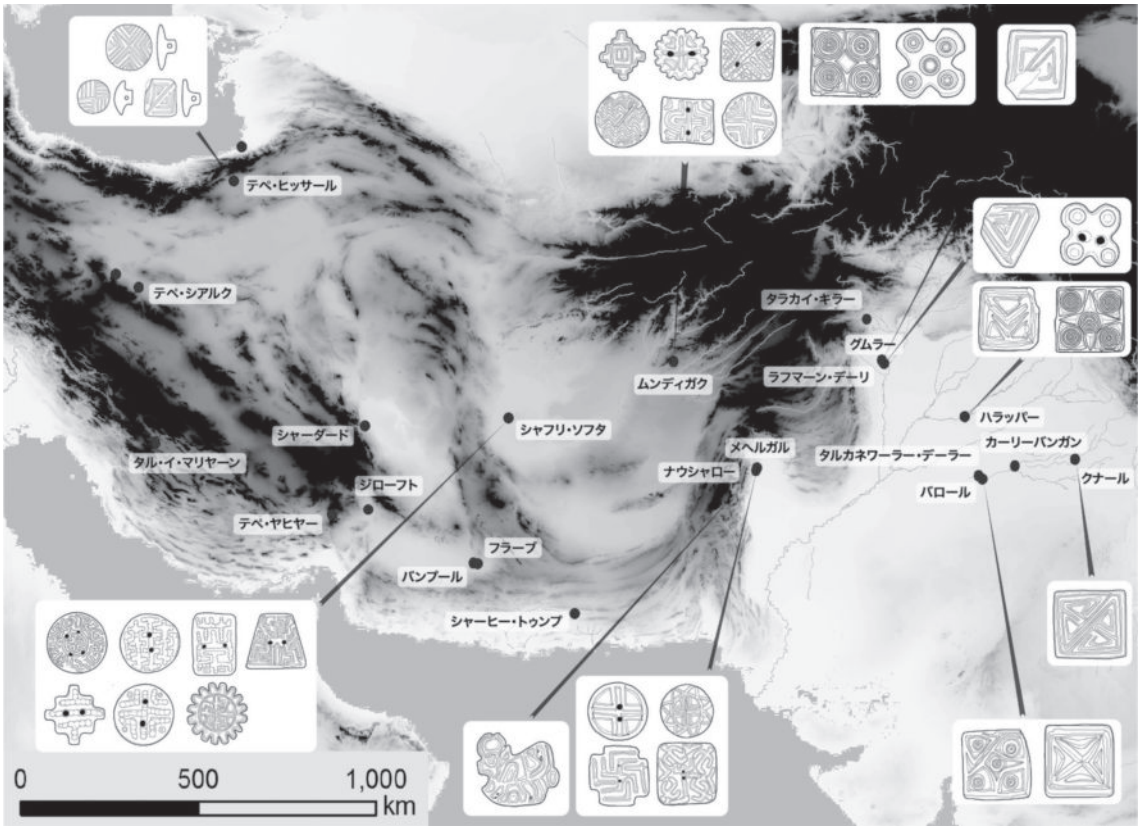

図 3　先インダス文明期の幾何学文印章の分布（Uesugi 2011d 掲載図面をもとに筆者作成）

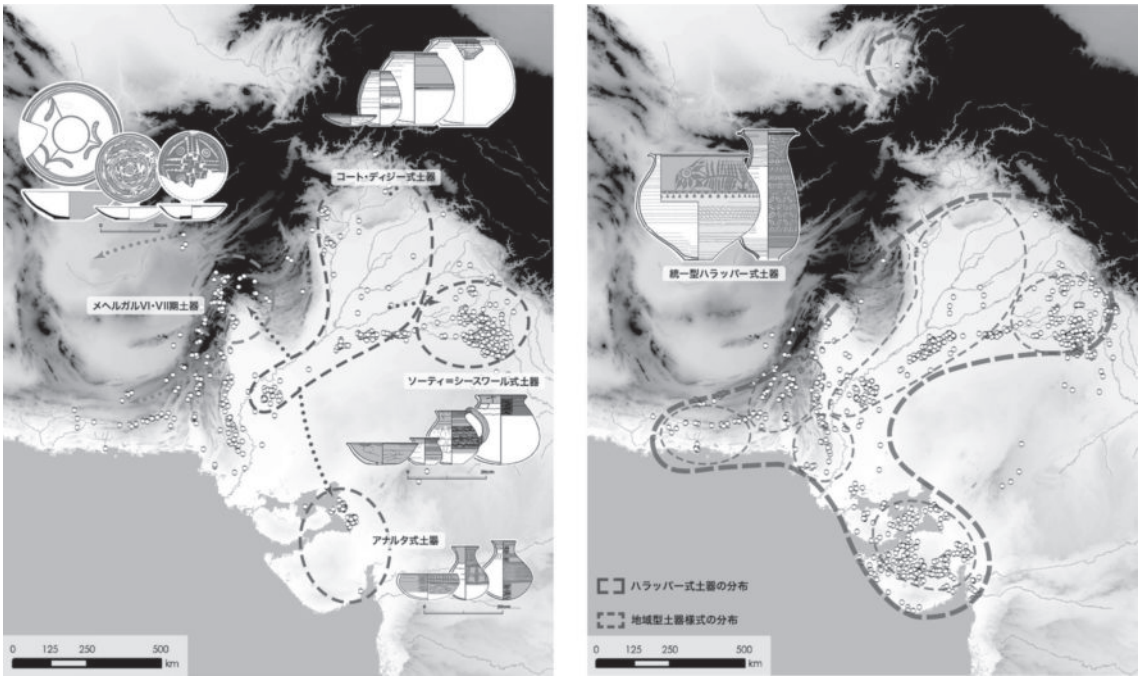

図 4　先インダス文明期（左）～文明前期（右）にかけての土器様式群の分布（上杉 2017 より）

ワークが先に述べた幾何学文印章の展開と連動しているものと推測され、そこには交流関係の強化が反映されていると考えられる。

このように前 4 千年紀後半と前 3 千年紀前葉では、インダス地域の社会＝文化的様相は大きく異なっており、後者の時期における様相はインダス文明社会成立過程の一断面を示していることは確かである。この視点に立てば、遺跡や小地域レベルでも多様な変化が生

じている可能性が高く、編年の精度が向上がすれば刻々と社会が変化していく過程を描き出すことが可能になるものと考えられる。

3　インダス文明期の課題

ハラッパー式土器成立の背景

インダス文明社会の成立を理解する上で最も重要なのは文明期を通して広域に展開するハラッパー文化である。どういった要素をハラッパー文化固有のものとするか実は明確な定義がないが、ハラッパー式土器が文明期を通じて継続的に存在していることが形態的・技術的特徴によって把握できるので、ハラッパー文化の理解においてこの土器の分析が重要な位置にあることは確かである。また現有資料ではインダス式印章がハラッパー文化固有の器物かどうか判然としないが、ハラッパー式土器とともに広域に分布するところからみて、ハラッパー文化ときわめて近しい関係にあることは明らかである。文明期を通じて存続する点もハラッパー式土器と共通しており、インダス式印章の分析がインダス文明社会の展開を理解する上で重要である。

この 2 つの考古資料をもとにインダス文明社会、すなわちハラッパー文化の成立と展開を検討することが、インダス文明社会を時空間上で体系的に理解することにつながると考えられる。ハラッパー式土器、インダス式印章の起源については、先述のコート・ディジー式土器、幾何学文印章との関係が注目されるところであるが、現有資料でみるかぎり、コート・ディジー式土器とハラッパー式土器、幾何学文印章とインダス式印章の関係は複雑である。コート・ディジー式土器や幾何学文印章が文明社会形成過程において大きな役割を果たしているとすれば、これらから文明期のハラッパー式土器やインダス式印章への連続性が認められてよさそうなものであるが、コート・ディジー式土器とハラッパー式土器、幾何学文印章とインダス式印章は様式的に大きく異なっているのである。小茄子川歩氏はこうした差異を断絶として評価し、文明社会形成過程における新たな「伝統の創出」としてインダス文明社会成立を説明しようとするが（小茄子川 2008, 2016）、編年軸の精度の低さが大きな障壁となって、先文明期から文明期への移行過程を理解することは容易ではない。未発見の資料がそれぞれの漸移的変化を明らかにする可能性もあり、「伝統の創出」として解釈できるかどうか不明な点が多い。

ただし、ハラッパー式彩文土器の彩文様式・構成にはバローチスターン地方のファイズ・ムハンマド式土器の要素が取り込まれている可能性は高く、彩文様式の違いがコート・ディジー式土器とハラッパー式土器を分けるもっとも大きな指標となっている。インダス文明成立直前期の前 3 千年紀前葉にコート・ディジー式土器がバローチスターン地方中央部のメヘルガル VII 期土器と関係を深めていることも、このファイズ・ムハンマド式土器とハラッパー式彩文土器の関係を示唆している。ただし、形態的には、ハラッパー式土器はコート・ディジー式土器との近縁性が高く、ファイズ・ムハンマド式土器を含むメヘルガル VII 期土器がハラッパー式土器の祖形になっているのではなく、コート・ディジー式土器がメヘルガル VII 期土器との交流関係を強めてその要素を取り込んで新たな彩文様式を生み出したというのがより妥当な解釈である。その過程は判然としないものの、結果としてはハラッパー式土器がコート・ディジー式土器を母体としつつバローチスターン地方中央部の要素を取り込んで再編して成立したということになり、それを文明社会の成立と結びつけて俯瞰的に評価すれば「伝統の創出」あるいは「新たな価値体系の創出」ということになるだろう。いずれにしても、先文明期の社会から文明期の移行過程には複雑な地域間関係とその解体・再編といった現象が内包されている可能性が土器資料の検討に垣間見える。先文明期から文明期の社会への移行過程の解明において土器資料の分析がきわめて有効であるのは、土器が普遍的に出土する考古資料であり、地域間・様式間の関係や時空間的変異の把握が容易であるという点にある。

ハラッパー式土器からみたインダス文明期の細分

上述のように、インダス文明社会が展開した広域空間および全期間をカバーする編年のものさしとしてハラッパー式土器が有効であることは、インダス文明成立期に限られるものではない。かつてインダス文明が物質文化においてきわめて変化に乏しいと評されていた（例えば、Marshall 1931: 103; 辛島ほか 1980）のに対し、近年の研究はインダス文明が時空間軸上において多様性あるいは変化に富むものであることが徐々に明らかになりつつある。そうした空間的多様性、時間的変化が文明社会の衰退にも大きく関わっている可能性が高い。そうした理解の上でハラッパー式土器が重要な研究対象となるのである。

ハラッパー式土器に時間的変化があることは、古くは R. E. M. ウィーラー（Wheeler）もその可能性を示唆し（Wheeler 1947, 1953: 71）、またチャヌフダロ（Chanhudaro）遺跡（Mackay 1943）やアムリー遺跡（Casal 1964）、モヘンジョダロ遺跡（Dales and Kenoyer 1986）、ハラッパー遺跡（Meadow ed. 1991; Jenkins 1994, 2000）の出土資料に垣間見ることが可能であったが、明確に編年の指標となることを示したのは、G. クィヴロン（Quivron）によるハラッパー式

彩文土器の研究である（Quivron 2000）。氏はバローチスターン地方中央部のナウシャロー（Nausharo）遺跡 II・III 期出土の良好な資料を対象として、ハラッパー式彩文土器の文様要素・構成の分析を行い、初現期、第 1～3 段階の計 4 段階にハラッパー式彩文土器を分期している。分析対象資料が必ずしも多くないことから、今後のさらなる資料の分析が不可欠ではあるものの、この研究によってはじめて特定の考古資料にもとづいてインダス文明期を細分することが可能であり、かつ重要であることが示されたのである。

筆者もこの氏の研究に触発されて、ハラッパー式土器の細分を試みてきた（Uesugi 2011a, 2011b, 2013a, 2017; Uesugi and Meena 2012; Uesugi and Dangi 2017）。筆者が研究の出発点としたのはファルマーナー（Farmana）遺跡墓地出土の副葬土器（Uesugi 2011b）で、いうまでもなく墓ごとの一括資料である。その形態分類と墓の重複関係をもとに副葬土器に含まれるハラッパー式土器の時間的変化を検討した。詳細は省略するが、そこで得られた形態変化を他の遺跡から報告されている資料と組み合わせることで、インダス文明期の古い段階から終末段階にかけてのハラッパー式土器の変化の方向性が明らかになっている（図 5）。

クィヴロンの彩文土器研究と筆者によるハラッパー式土器全体を視野に入れた研究の成果を組み合わせると、インダス文明期は大まかながらも早・前・中・後期に分期することが可能である（図 5）。既存の ^{14}C 年代値から各時期のおおよその目安として実年代を措定すると、早期が前 2600 年前後、前期が前 2500～前 2400 年頃、中期が前 2400～前 2200 年頃、後期が前 2200～前 1900 年頃となる。

早期のハラッパー式土器の様相は資料的制約が大きく、その空間的な分布範囲も判然としないが、前期になるとインダス地域各地（シンド、パンジャーブ、バローチスターン、ガッガル、グジャラート）にハラッパー式土器が分布するようになる（図 4 右）。アフガニスタン北部のラピスラズリ産地近郊にあるショールトゥガイ（Shortughai）遺跡（Francfort 1989）もこの段階のものと考えられる。中期にも共通の特徴をもったハラッパー式土器が各地に分布している。後期になると、シンド、パンジャーブ地方では中段階までの様式的特徴を踏襲しつつ変化したハラッパー式土器が分布するが、グジャラート地方ではソーラート・ハラッパー式土器、ガッガル地方ではバーラー式土器と呼ばれる、ハラッパー式土器を祖形としながらも地域的な様式的特徴を強化した土器群が出現する（図 9 左）（Uesugi 2013a, 2018a; Uesugi and Dangi 2017）。前・中期の各地に分布する共通した特徴をもつハラッパー式土器を統一型ハラッパー式土器、後期のシンド＝パンジャーブ型ハラッパー式土器、ソーラート・ハラッパー式土器、バーラー式土器を地方型ハラッパー式土器と呼ぶことができる。

後期には、こうした統一型から地方型のハラッパー式土器への分化に加えて、バローチスターン地方においてクッリ式土器が広範に展開するようになる（図 9 左）。前・中期にインダス地域各地で共通する特徴をもったハラッパー式土器が広く分布していたのに対して、後期にこうした地域ごとに異なる様相が出現することは、特定の土器に対する志向性、需要、生産、流通、消費という一連のシステムが後期になって大きく変化したことを示している。それはすなわち、インダス文明社会を支える交流ネットワークと統合システムの変容を示している。こうした変化がどのような要因によって生じたのか判然としないが、後期に生じた地域型土器様式がポスト・インダス文明期へと変化しながらも存続することを考えると（図 9 右）（Dangi et al. 2015）、直接的か間接的かは別にしても、大きくみればインダス文明社会の衰退として帰結する社会変容プロセスの一端に関わっている可能性が想定できる。

また後述するように、後期にバローチスターン地方において顕在化するクッリ式土器は、インダス平原のハラッパー式土器と関わる一方で、イラン高原やアラビア半島とも関係を有しており（近藤ほか 2007; 上杉 2017）、広域交流ネットワークの中で一定の役割を果たした社会＝文化集団の産物と考えられる。そうした集団の台頭は、前・中期にバローチスターン地方へと進出していたハラッパー文化にも大きな影響を及ぼす出来事であった可能性が高い。

このように土器からみると、後期においてインダス文明社会の交流ネットワーク＝統合システムは中期以前と大きく変化していることがわかる。こうした状況を解釈するためには土器の検討だけでなく、ほかの考古資料の分析が不可欠である。例えば、R. ロウ（Law）によるハラッパー遺跡で消費された石製装身具・石器素材の産地同定研究（Law 2011）によると、後期におおむね併行するハラッパー遺跡 3C 期においてもっとも多様な石材がハラッパー遺跡遠近各地の石材産地から搬入されているという。石材の移動がこの時期にもっとも活発であるということであり、地域型土器様式群の出現が物資の移動を矮小化させたわけではないことを示している。より多角的な考古資料の分析が土器に確認される現象を説明するのに不可欠である。

広域様式ハラッパー式土器と地方様式土器群との関係

土器に関連して今一つ注目されるのは、広域展開を志向するハラッパー式土器とは対照的に、インダス地域各地で先文明期から続く地域型土器様式群の存在で

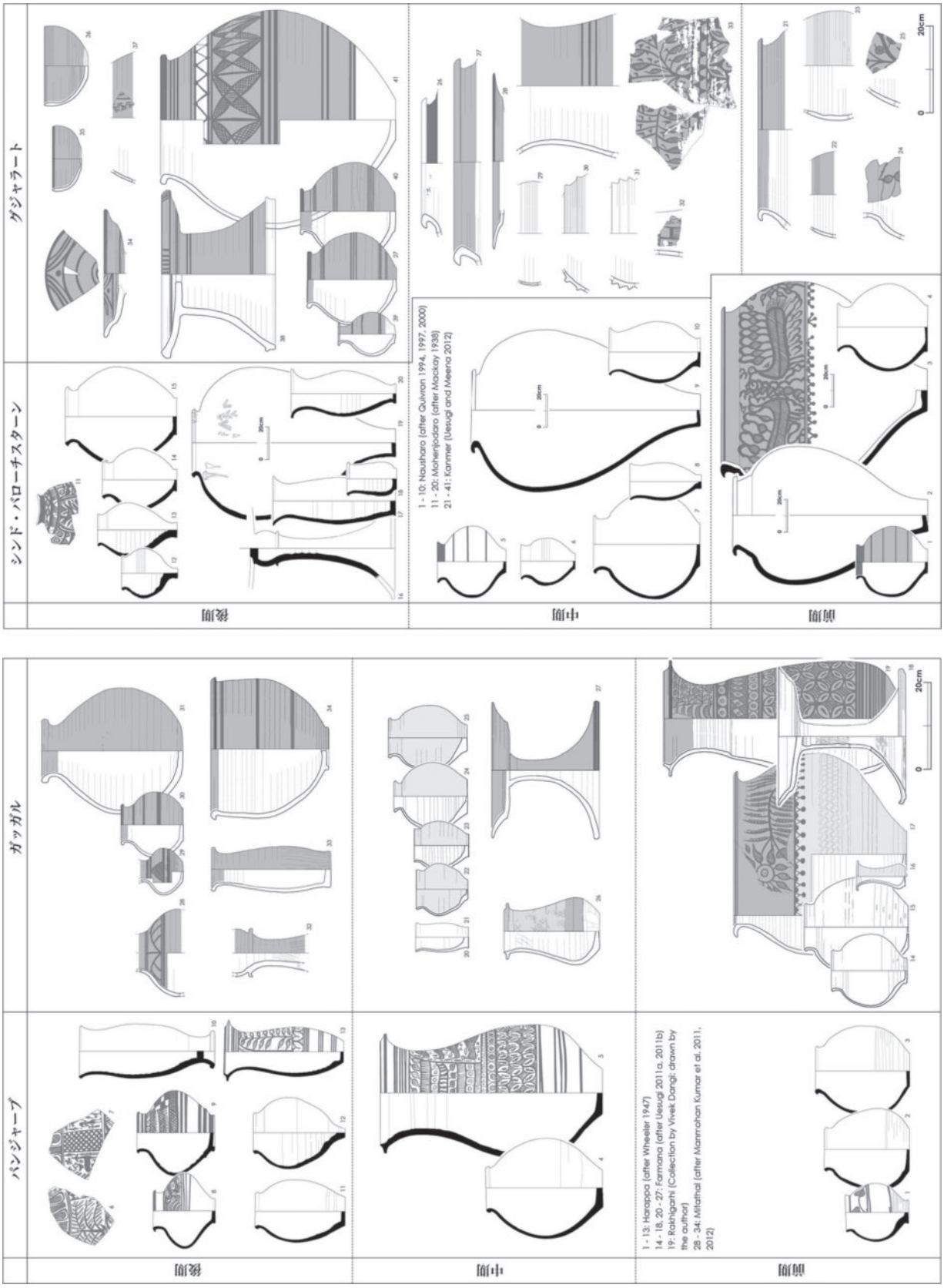

図 5　ハラッパー式土器の形態変化（Uesugi 2019 より。一部変更）

ある。例えば、ガッガル地方ではソーティ＝シースワール式土器と呼ばれる土器様式が先文明期から文明期終末期にかけてハラッパー式土器とともに存続しているし（Uesugi 2011a, 2017; Manmohan Kumar et al. 2011, 2012）、グジャラート地方では同じく先文明期に起源をもつアナルタ式土器が文明期を通して生産・消費されている（Uesugi and Meena 2012）。バローチスターン地方において後期段階に顕在化するクッリ式土器もその彩文の祖形を先文明期終末期のナウシャローID期土器にたどることができ（近藤ほか2007）、地域型土器様式の存続の一例に加えることができるだろう。

ハラッパー式土器の起源については、先に述べたようにその形態的・技術的特徴からするとコート・ディジー式土器を祖形としていると考えられ、バローチスターン地方中央部との関係からみるとシンド地方がその起源に関して有力な候補となるが、前期には周辺地域へと広域に拡散したことは先に述べたとおりである。前期から中期にかけてのハラッパー式土器がどのような仕組みによって広域的共通性を維持していたのか判然としないが、そうしたハラッパー式土器は拡散先の地域において既存の土器様式を置き換えたのではなく、既存の土器様式と併存していたのである。

筆者が発掘調査に関わったガッガル地方のファルマーナー遺跡やミタータル（Mitathal）遺跡、グジャラート地方のカーンメール（Kanmer）遺跡やシカールプル（Shikarpur）遺跡などでは、ハラッパー式土器と在地の土器が同一居住空間から混在して出土しており、使用者層が異なっていたという状況は認められない。ファルマーナー遺跡墓地では、ハラッパー式土器と在地のソーティ＝シースワール式土器のいずれかのみが副葬される墓も確認される一方で、両者が混在する例も多い（Uesugi 2011b）。また、墓の副葬土器にハラッパー式土器を模倣したソーティ＝シースワール式土器も存在しており、両者が同一の消費空間できわめて近しい関係にあったことも確実である。

ハラッパー式土器と在地の土器様式の共存関係は、地方型ハラッパー式土器が出現する後期においても存続する。例えばグジャラート地方では、後期には地方型ハラッパー式土器であるソーラート・ハラッパー式土器と先文明期以来の在地様式であるアナルタ式土器を主体として、シンド地方から搬入されたと考えられるシンド＝パンジャーブ型ハラッパー式土器と北方のアラヴァリー山脈方面からもたらされたと考えられる黒縁赤色土器が客体的に加わるという複雑な構成を示している（Uesugi and Meena 2012）。これら異なる様式に属する土器群が消費空間においては明確な区別なく消費されているが、生産・流通システムは別個であったと考えられ、複数系統の土器様式群が集落や墓といった消費空間においてどういった意味・価値を有していたのか、またどのように消費されていたのか、それらが混在する状況がどのような社会的背景を示すのかなど、多くの研究課題がある。

興味深いのは、前・中期にはファルマーナー遺跡墓地の模倣例を除くと、ハラッパー式土器と在地の土器様式間で明確な影響関係はみられないのに対し、後期にはハラッパー式系統の土器様式と在地土器様式の融合現象が認められることである。バーラー式土器の場合は技術的にはハラッパー式土器の形態や高速回転依存型の成形技術を基盤としてソーティー・シースワール式土器の彩文やミガキ調整を取り込んでいる。グジャラート地方ではソーラート・ハラッパー式土器とアナルタ式土器の形態・彩文・製作技術の上での融合現象をみることができる。後期の土器様相はこの点においても前・中期とは大きく異なっており、インダス文明社会の性質が変容していたことを示唆している。

印章からみたインダス文明社会の内外

インダス式印章は平面方形で、印面に動物文を中心とする形象文とインダス文字を刻み、背面に有孔つまみをもつという特徴を有する（図6）。先文明期の幾何学文印章では、中央に2つの孔をあけて紐を通すタイプと背面に有孔つまみをつくるタイプがあり、後者はインダス式印章に共通する特徴といえるが、幾何学文とインダス式印章にみられる形象文は著しい違いとなっている。どのような過程で形象文が印章に取り込まれるようになったのかほとんど手掛かりがなく、結果的に両者の「断絶」となっている。印章は土器以上に象徴的な意味・価値をもつ器物であり、そこに描かれる図像は政治的あるいは宗教的な意味・価値を付与されていたと考えられる。それが社会の変革期において図像を一新させる要因となっている可能性が高い。文明社会という強い求心力をもつ社会が成立するときにそのシンボルたる印章の形態や図像が政治的な意図をもって突然的に変革されるということは十分に考えうるところである。

インダス式印章の研究において問題となるのは、最古段階の印章が特定できないことにある。インダス文明の遺跡では印章は墓に副葬されることはなく、集落遺跡の生活空間域に保管もしくは廃棄されたかたちで出土する。個人に帰属するものではなく、世代を超えて伝世していた可能性が高い。したがって、遺跡での出土層位が示す時期が印章の製作時期から大きくかけ離れてしまっている可能性があるということになる。編年精度の粗さとも相まって廃棄時期も特定できない現状では、インダス式印章を時間軸上で理解することがほぼ不可能である。

インダス式印章にはさまざまな形象文が表現されて

図6　インダス式印章第1類と第2類（1：バガーサラー遺跡、2〜4：ファルマーナー遺跡）
（バガーサラー遺跡出土資料については、マハーラージャ・サヤージーラーオ大学考古学・古代史学科所蔵資料を同学科の許可を得て筆者が撮影したもの。ファルマーナー遺跡出土資料については（Konasukawa et al. 2011）より転載。筆者作成）

おり、形象文の表現も多様である。圧倒的に中心をなすのは一角獣であるが（印章全体の約80%）、そのほかにも短角ウシ、ゾウ、コブウシ、スイギュウ、サイ、複合獣、人物（神もしくは王か）などがある（小茄子川 2007）。先述のように、インダス式印章が個人に帰属する器物ではないとすれば、図像が個人の嗜好によって選択されたのではなく、なんらかの関係によって結ばれる集団によって、あるいは集団間の関係によって決定された可能性が浮上する。

この可能性を具体的に示すのが、アラビア半島からメソポタミアで出土する湾岸式印章である（Mitchell 1986; Laursen 2010; Olijdam and David-Cuny 2018）。湾岸式印章は平面円形である点においてインダス式印章とは異なるが、背面の二瘤形のつまみや印面のインダス文字と短角ウシの刻出（図10右上）は、インダス式印章と強い関係を示している。短角ウシが卓越的に採用されることは、湾岸式印章がアラビア半島方面との交流に関わるインダス系集団のシンボルであった可能性が指摘できるのである。インダス域内では特定の図像が特定の地域や遺跡に集中するという現象は認められないことから判然としないが、湾岸式印章においては図像が偶発的な要因によって選ばれるものではなかったことを示している。

今一つ、近年のインダス式印章研究で注目されるのは、側面観の動物が左向きに配置されるのがインダス式印章の図像構成の主体である中で（図6左）、動物が右を向く例（図6右）が限定的ながらも存在することである（小茄子川 2007; 上杉 2013）。この一群は単に動物の方向だけでなく、動物の表現スタイル、動物に伴うインダス文字の種類・数、彫刻技法（小茄子川 2013; Uesugi et al. 2017）、半円筒形を呈する背面のつまみの形状などの諸点において、前者の左向きタイプとは明確に異なっている。さらにインダス地域の中でもガッガル地方の遺跡に集中するという傾向をもつ。以上の違いから、左向きタイプをインダス式印章第1類、右向きタイプを第2類として分類することができる。

第2類をインダス式印章の中でも古層に属するものとして理解しようとする見解があるが（Kenoyer and Meadow 2010: liii）、状況はそれほど単純ではない。第2類の中には一角獣のほかにスイギュウやヤギを描いた例があり、動物の前方もしくは上部に樹木形の文字もしくはシンボルが表現されるものが多い。これらの特徴は第1類にはみられない特徴であり、第1類との間には著しい様式的差異がある。とすると、編年的位置の違いではなく、そもそも系統が異なっている可能性が高い。出土する遺跡がガッガル地方に集中することから、ガッガル地方の地域型である可能性（Ameri 2013）も否定できないが、出土遺跡が製作地を示すかどうか断定できないところもあり、その解釈は難しい。

ここで注目されるのが動物と樹木の組み合わせである。第1類の印章に表現される動物のうち、一角獣の前方に供献台、短角ウシでは飼葉桶が置かれており、特定の動物と器物の結びつきをみてとることができるが、第2類の印章では動物の種類に関わらず樹木形の文字もしくはシンボルが組み合わさる例が多い。樹木形は動物の前方に置かれる場合もあれば上部に配置されることもあり、また樹木以外の文字あるいはシンボルが配されることもあるなど、第1類ほど明確な規則性があるわけではないが、第1類とは異なる図像構成をもつことは確実である。

その中であえて動物と樹木形の組み合わせに着目すると、バローチスターン地方の先文明期末から文明期

後半のクッリ式土器へと受け継がれるコブウシと樹木の結びつきに注目できる。クッリ式土器の場合、樹木文と組み合わさるのはほとんどの例においてコブウシであるが、客体的ながらもヤギが表現されることがあり、動物と樹木を組み合わせた文様構成を確認することができる。この文様構成は先文明期末のナウシャローID期土器に起源をもつが、その祖形はファイズ・ムハンマド式土器にたどることができ、前3000年頃以降のバローチスターン地方の彩文土器において一種の伝統をなす文様構成であることがわかる。

このクッリ式土器は、東のハラッパー式土器と交流関係をもつだけでなく、イラン高原南部のバンプール式土器やアラビア半島に展開したウンム・アン＝ナール式土器とも関係を有しており、クッリ式土器の図像を刻んだ円筒印章がメソポタミア南部のウル（Ur）遺跡でも出土している（近藤ほか 2007; Uesugi 2013b, 2018a）。すなわち、前3千年紀後半から前2千年紀初頭の西南アジア世界の中で広域的な交流関係の中で展開したのがこのクッリ式土器である。

ここで注目されるのは、動物と樹木の組み合わせが前2千年紀前葉のディルムン式印章にも確認できることである。ディルムン式印章は上掲の湾岸式印章の系譜の上で新たな図像を発達させて成立したと考えられるが、その図像の中にウシ、ヤギ、樹木の組み合わせが高頻度で確認できる。図像要素はほかにも人物やヘビ、ネコ科の猛獣など多様であり、図像構成もインダス式印章とは大きく異なるが、そこにバローチスターン地方、さらにはインダス式印章第2類に類似する要素が存在することは注目に値する。

ディルムン式印章が展開した前2千年紀前葉の時期には、バハレーン島とインダス地域との交流が活発であり、クッリ式土器の広域的交流関係も考慮すると、バローチスターン系の要素がディルムン式印章に取り込まれる可能性はまったくないとは言い切れない。この可能性を検証するためにはさまざまな資料の分析が不可欠であるが、第2類のインダス式印章が単なる傍流の地域型にはとどまらない可能性を指摘しておきたい。

加えて、インダス文明期に幾何学文印章が存続していることも重要である（図2）。グジャラート地方の文明期の遺跡では先文明期と共通する花弁形同心円文印章が若干数ながら出土しているほか、平面方形で同心円文や卍文、十字文を刻んだ例などが知られている。幾何学文印章が文明期にも製作・流通していたことを示すものであり、その使用者や意味・価値は動物文を刻むインダス式印章とは異なっている可能性が高い。現状では解釈は難しいが、インダス文明社会が多様な印章の存在によって示される多様な社会＝文化集団の活動を示唆している可能性が高いであろう。

石製装身具がもつ重要性

インダス文明期の物質文化を特徴づけるもう一つの器物として石製装身具がある。装身具に使われた素材には石材のほかに、貝、金、銀、銅、ファイアンスなどがあるが、石製装身具には原産地が異なる多様な石材が含まれ、製作工房址も数は多くないながらも検出されていることから、ほかの素材のものに比べて多角的なアプローチが可能である。基本的な特徴については前稿（上杉 2015a, 2015b）を参照されたいが、ここでは石製装身具がインダス文明社会の理解においてどのような意味をもつのか考えてみたい。

石製装身具はインダス地域においては比較的多くの遺跡で出土する器物であるが、出土点数、石材、形態、法量、出土状況などの情報が得られる調査事例はきわめて限られている。また、研究の面においても、ハラッパー遺跡出土資料についてはJ. M. ケノイヤー（Kenoyer）による一連の研究群があるが（Kenoyer 1991b, 1997, 2005, 2017）、詳細なデータの公表は限られている。結果的にインダス文明を代表する器物でありながらも、石製装身具の重要性を具体的な分析を通して示した研究は限られているのが現状である。結果として、一つの遺跡内での石製装身具のあり方の検討や、遺跡・地域間での比較による石製装身具の空間的変異の理解、時間軸上での変化の分析が困難となっている。

石製装身具に用いられる各種石材はそれぞれ産地が異なっており、インダス地域全域で同じように調達することができる資源ではない。遺跡の性格やインダス文明社会内での位置づけによって、出土する石製装身具の種類・数量が異なっている可能性が高く、出土点数にかかわらずその悉皆的報告・分析を行わない限り、石製装身具がもつ社会＝文化的意義を正しく理解することができないことはいうまでもないであろう。そうした現状を打開するための研究事例の蓄積が不可欠である。

筆者自身の研究（上杉 2015a, 2015b; Uesugi, Manmohan Kumar et al. 2018）から、今後の石製装身具研究の方向性について示すと、先文明期と文明期のビーズの素材・形態（法量も含む）の組成の違いを実際の資料にもとづいて提示することがまず重要である。文明期前期を中心とするファルマーナー遺跡（集落）では瑪瑙、紅玉髄、碧玉、凍石、アマゾナイト、玉髄、石灰岩、ラピスラズリなどを用いた多様なビーズが出土しているが、石材別にみるとそれぞれで形態的特徴が異なっており（図7）、石材ごとにその価値や意味、生産・流通量、消費のコンテクストなどが異なっている可能性が高い。換言すると、少なくともファルマーナー遺跡では、石材と形態が結びついた多様性がおそらくは社会・文化的コンテクストと連関

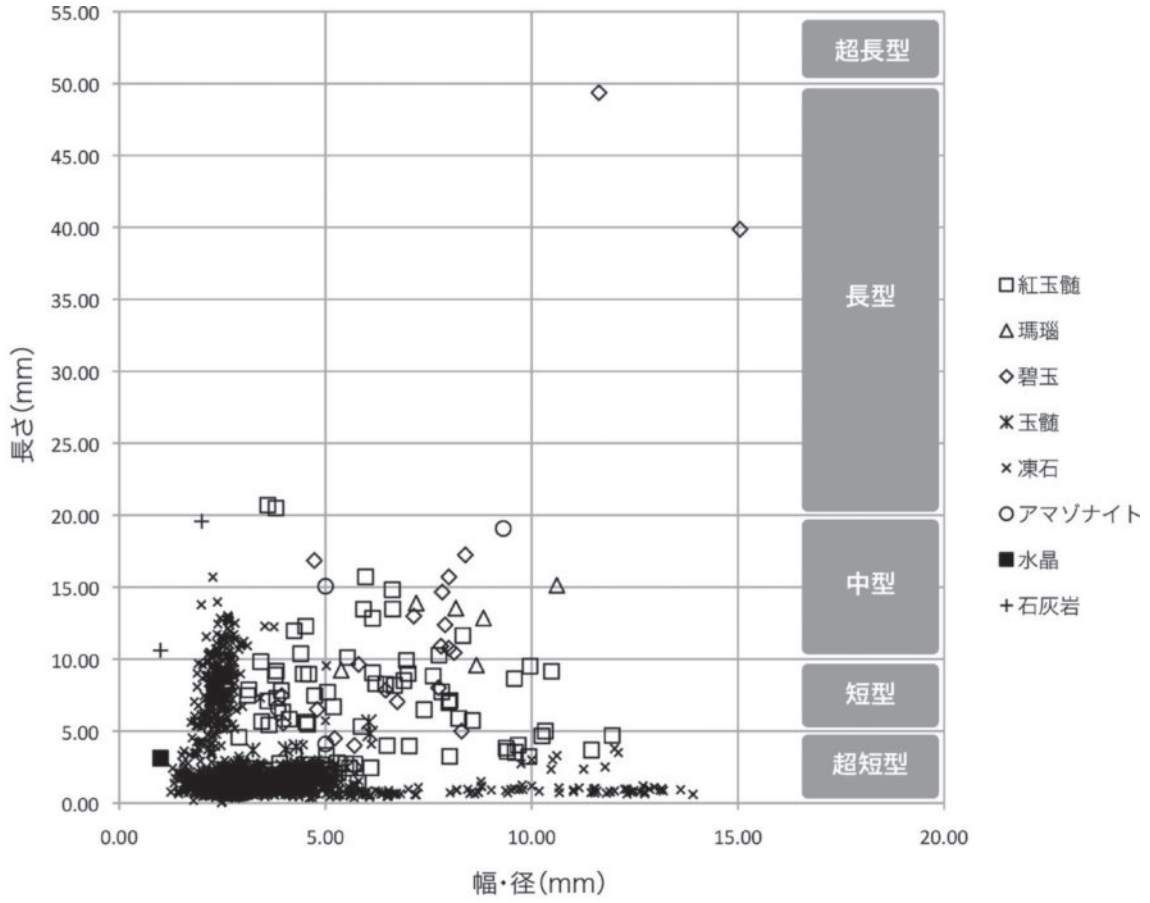

図7　インダス文明期の石製ビーズの石材と法量の分化（上杉 2015a より）

して石製装身具の特徴となっているということになる。そうした多様なビーズ構成がいつの段階でインダス地域において生み出されたのか明らかにするためには、先文明期の石製ビーズあるいは装身具の構成を地域ごとに分析することが求められる。

この石製ビーズの素材・形態組成という点と関連して注目されるのは、長さ 10 cm 前後におよぶ紅玉髄製超長型ビーズである。硬質石材を用いたビーズの場合、長さが大きいほど高度な穿孔技術が必要となる。複数のドリルを用いた熟練の技術が必要とされ(Kenoyer and Vidale 1991; Kenoyer 1997)、インダス文明期のビーズあるいは石製装身具の中でもきわめて価値の高い特別品であったと想定される。先の組成と同じく、重要なのはこうした超長型ビーズがいつの段階で出現し、いつまで生産・流通するのかという点である。現在までに公表されているデータからすると、先文明期には存在していなかったようであるが、文明期の初期の段階から存在するのか、新しい段階に加わるのか不明である。おそらくこうした特別品は厳格に管理された生産・流通システムを伴っていた可能性が高く、インダス文明社会のおける権力組織とも関わる可能性がある。

ビーズの製作工房址は多数の石材産地を擁するグジャラート地方において多く検出されている。詳細な分析事例がないため想像の域を越えないものの、小規模工房から都市に所在する大規模工房まで、比較的低位の社会階層にビーズ・装身具を供給する工房から特別品を管理的に生産・供給する工房まで、その生産・流通システムは多様であった可能性が高い。こうした点を明らかにするためには先述のように悉皆的な分析が不可欠である。

上述のように、瑪瑙や碧玉などの硬質石材に孔をあけるには高度な技術が不可欠である。J. M. ケノイヤーを中心とする穿孔技術研究はそうした石製ビーズの技術的側面の解明をめざすものであり、事実インダス文明期の石製装身具の理解に大きな貢献をなしているが、この分野の研究においても悉皆的な分析事例の蓄積と提示が求められている。インダス文明期には、アーネスタイトと仮称される石材を用いた円柱状ドリル、先細型石製ドリル、銅製円柱状ドリルなどの存在が特定もしくは推定されているが（Kenoyer 2017)、それらが時空間的にどのように変化・変異するのか明らかにするためには、より多くの遺跡から出土した資料の網羅的分析が求められる。アラビア半島（図 10

右下）やメソポタミア地域、中央アジア南部などの地域で出土する石製ビーズの由来を検討する上でも、インダス地域における悉皆的分析事例の蓄積がきわめて大きな意味をもつ。

4　インダス文明の衰退をめぐって

インダス文明の衰退を特徴づけるのは都市の廃絶と文字の使用停止である。パンジャーブ地方のハラッパー遺跡では前 2 千年紀前半まで居住が継続するが、シンド地方のモヘンジョダロ遺跡、グジャラート地方のドーラーヴィーラー（Dholavira）遺跡、ガッガル地方のカーリーバンガン遺跡などでは、都市空間が前 2 千年紀初頭には廃絶している可能性が高い。また、インダス文字はポスト文明期（前 2 千年紀前半）には確認されず、前 2 千年紀後半以降の文化にも継承されないことから、都市の廃絶とおおむね時を同じくして使用が停止していると考えられる。

都市の衰退・廃絶現象

しかしながら、ここでも問題は衰退の時期を遺物の相対編年あるいは実年代において把握することが難しいことである。遺構の変化の中で居住空間の変化・廃絶および廃絶後の土層堆積は考古学的に明確に確認することが可能であり、廃絶前後の時期の層序に伴う出土遺物の把握も決して不可能ではないと考えられるが、第 1 節で述べたように層位を含めたコンテクストごとの出土遺物の分析・報告がなされないため、廃絶現象に相前後する時期の遺物群の特定が不可能となってしまっているのである。

筆者が発掘調査を実施したガッガル地方のミタータル遺跡では下層で日干煉瓦積建物群によって構成される居住空間があり、その上位に日干煉瓦積建物を伴わない土坑群のみからなる遺構面が検出されている（図 8 上）（Manmohan Kumar et al. 2012）。さらに両者の間には薄い洪水層が検出されている。少なくとも発掘調査区域では遺構の性格、すなわち空間利用のあり方が大きく変化していることが確認されている。さらに下層の日干煉瓦積建物の最上面の床面に伴う土器片集中部を検出しており、考古学的に把握される上では煉瓦積建物最終段階の遺物を検出している。上層の土坑群からは銅精錬に関連する土坑から採取した炭化物資料の ^{14}C 年代測定によって 2136–1965 calBC（95.4%）という値を得ており、日干煉瓦積建物廃絶のおおよその年代を推定することができる。これに土器の形態的特徴（図 8 下）を組み合わせれば、実年代を付与した相対編年の構築が可能であり、ミタータル遺跡において居住空間の大きな変化（おそらくはこの大規模集落の衰退・廃絶に伴う現象と考えられる）が生じた時期を絞り込めることになる。同様の調査は他の遺跡でも可能であるはずであるが、そうした成果が少なくとも公表されていないことがインダス文明衰退の時期の把握を困難なものとしている。

同じ問題が、都市遺跡の衰退のプロセスの把握を難しくしていることはいうまでもない。都市という大規模な居住空間の衰退・廃絶を検討するためには、遺跡各所で発掘調査を行うことが不可欠であるが、それぞれの調査区において上記のような層序と出土遺物の検討を行うことが求められる。その上で衰退・廃絶が遺跡内各所で斉一的に生じているのか、空間利用の変更を繰り返しながら衰退・廃絶へといたるのか把握する必要がある。また、衰退・廃絶のプロセスを遺構・遺物の変化に即して理解することも重要である。都市の衰退・廃絶現象はきわめて複雑な現象と考えられるため、基本的なデータの蓄積と多角的な分析が重要であることはいうまでもないであろう。

インダス文字の使用停止

文字の使用停止という現象についても同様である。インダス文字は、それが刻まれた対象物の中心が印章であり、上述のようにその製作時期を絞り込むことが難しいという問題がある。結果的にそこに刻まれた文字の帰属時期を厳密に把握することも困難である。しかしながら、インダス文字は印章のほかに土器に刻まれた例もあり、印章よりも文字が刻まれた年代を特定しやすいという特性がある。上述のミタータル遺跡の発掘調査では、日干煉瓦積建物埋土上層から 2 文字のインダス文字を刻んだ高杯もしくは鉢の破片（図 8 下）が出土しているが、高杯の形態的特徴は後期段階のバーラー式土器に伴うものである。少なくとも日干煉瓦積建物が完全に廃絶する前後の時期に帰属する資料と考えられる。こうした資料を蓄積していけば、少なくとも相対土器編年においてインダス文字使用停止の時期を絞り込むことが可能になるであろう。

遺跡分布パターンの変化

今一つ、文明衰退に関わる考古学的現象としてあげられるのは遺跡分布の変化である（図 9）（Teramura and Uno 2006; 上杉 2010）。インダス地域各地における分布調査の基本情報をまとめた G. ポセール（Possehl）による遺跡集成データ（Possehl 1999）に基づいて遺跡分布を検討すると、ポスト文明期には文明期に多くの遺跡が分布したシンド、パンジャーブ、バローチスターン地方で遺跡数が激減し、東のガッガル地方において遺跡数が増加する現象が確認できる。グジャラート地方ではガッガル地方ほどの増加現象は認められないものの、大きく減少する状況は認められない。すなわち、インダス地域西半部における

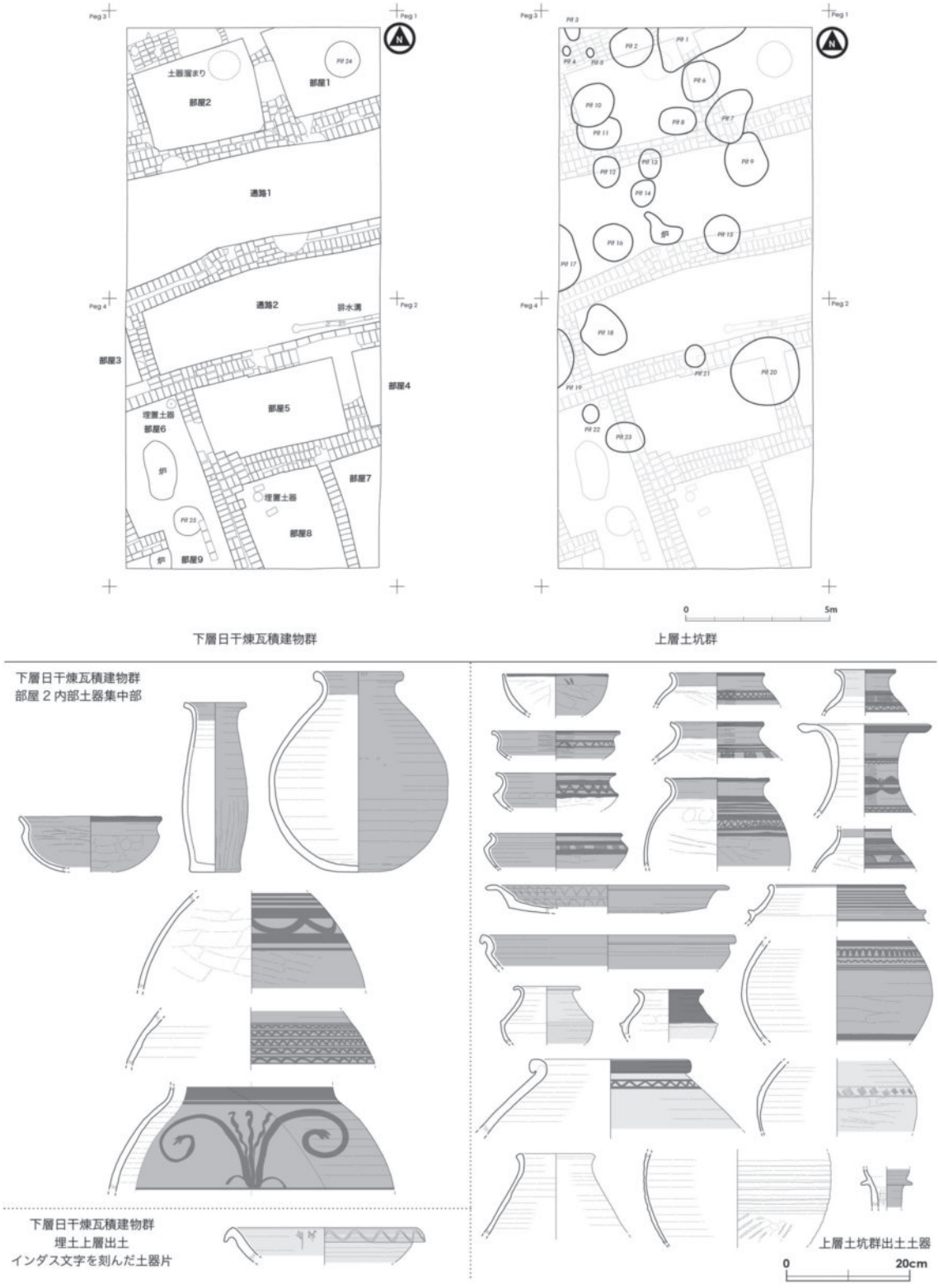

図８　ミタータル遺跡における遺構の変化と出土土器（筆者作成）

遺跡の減少と東方地域での遺跡数の増加・維持という現象をみることができるのである。この遺跡分布のパターンの変化についても、遺跡の時期推定に用いられた分布調査採集の土器資料がほとんど公刊されていないことや、分布調査実施以前における遺跡の破壊・消滅といった要因など、検討・考慮すべき問題はあるが、全体的な傾向としてポスト文明期に向かって遺跡分布の東方移動は認めてよいと考えられる。

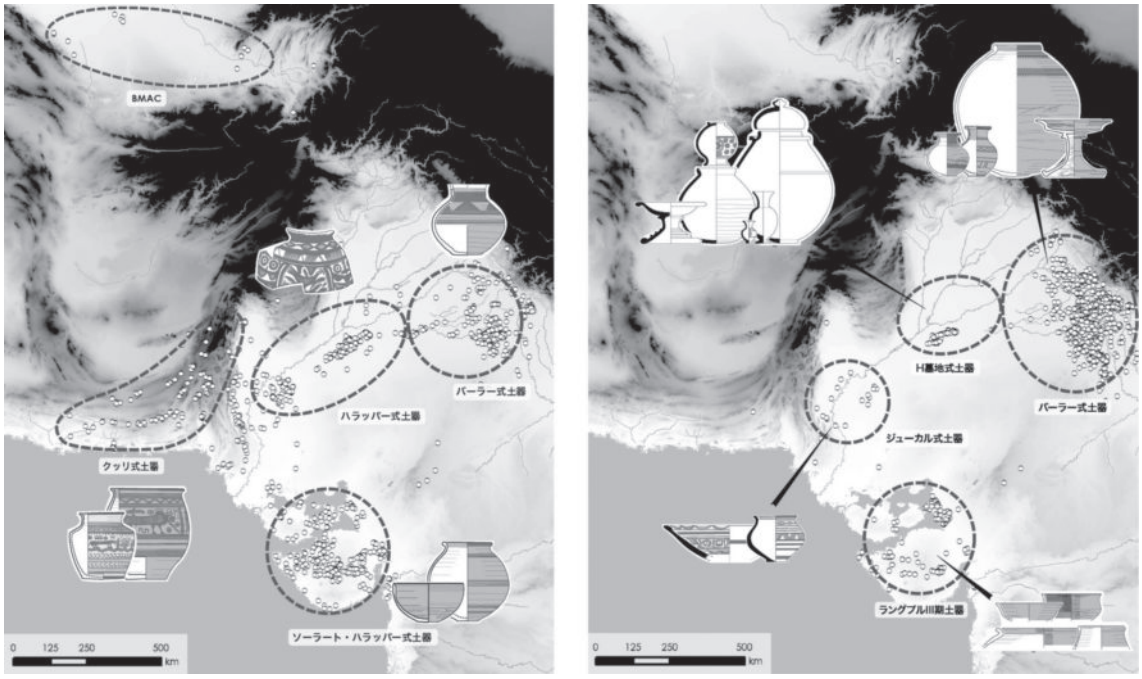

図 9　文明期とポスト文明期の遺跡分布（上杉 2017 より）

大規模人口を擁する都市が衰退・廃絶するということは、その住民がかつての都市を離れて移動・分散した可能性を強く示している。それが遺跡分布パターンの変化に現れている可能性は十分にあろう。そうした人口移動を傍証する考古資料は東方のガンガー＝ヤムナー・ドーアーブ地方からガンガー平原西半部において顕著であり、前 2 千年紀前半の時期にインダス文明期後期以降のバーラー式土器の流れを組む土器を主体とする遺跡が広く分布している（Uesugi 2018b）。こうした状況から東方への人口移動はかなりの確実性をもった考古現象と考えられるが、この人口移動に伴ってどのような社会の変化が生じたのかについてはほとんど不明である。2000 年代から 2 次にわたって発掘調査が行われたガンガー＝ヤムナー・ドーアーブ地方のサナウリー（Sanauli）遺跡では前 2 千年紀前半を中心とすると考えられる墓地が発掘されており（Sharma et al. 2004, 2006）、中には「馬車（chariot）」と呼称される車輪付きの乗り物が検出されている（Ahulwalia 2018）。このサナウリー遺跡を含むガンガー＝ヤムナー・ドーアーブ地方の遺跡の発掘調査が進めば、文明社会衰退後の社会の様相が明らかになることが期待される。

工芸品生産・流通システムの変化

このサナウリー遺跡では副葬品として多くの石製ビーズが出土しているが（Sharma et al. 2004, 2006）、文明期のビーズとの異同に関する比較研究が不可欠である。上掲のミタータル遺跡はサナウリー遺跡からおよそ 100 km に位置する遺跡であるが、この文明期後期からポスト文明期にかけての遺跡では石製ビーズが著しく少なく、代わってファイアンス製ビーズ・腕輪が多数出土している（Manmohan Kumar et al. 2011, 2012; Uesugi, Nakai et al. 2018）。近傍にある文明期前期のファルマーナー遺跡では多量の石製ビーズが出土する一方でファイアンス製装身具が少ないという状況は、文明期後期からポスト文明期にかけて石製装身具が減少し、代わってファイアンス製品が装身具の中心をなすようになった可能性を強く示しているが、サナウリー遺跡の状況はそれとは大きく異なっている。詳細な報告が得られない現状では想像の域を越えないが、ポスト文明期には石製装身具の生産・流通システムが文明期のそれから大きく変化している可能性があろう。ポスト文明期の様相はガッガル、ガンガー地方だけでなく、他のインダス地域においてもよくわかっておらず、今後の重要な研究課題である。

西方との交流関係

インダス地域と西方との交流関係も、文明社会の衰退現象に関連する問題である。インダス文明期に西方との海洋交易が活発であったことは、アラビア半島やメソポタミアの遺跡でインダス式印章や石製ビーズが多数出土することからよく知られているが、それが文明の衰退過程の中でどのように変化あるいは途絶したのか実はよくわかっていない。メソポタミアの粘土板文書において、インダス地域周辺を指すと理解される

「メルッハ（Meluhha）」という地名がイシン・ラルサ期にはみられなくなることから、前1800年頃までにはインダス地域とメソポタミアの交易は停止していたと考えられているが（近藤2011: 145–152）、アラビア半島北岸域、特にバハレーン島において前2千年紀前葉に位置づけられるインダス系土器（インダス地域に由来すると考えられる土器を総称してこの語を用いる）が多数出土している。カラートゥル＝バハレーン（Qala'at al-Bahrain）（Højlund and Andersen 1994）やサール（Saar）（Carter 2001; Killick and Moon 2005）などの集落遺跡でも出土しているが、注目されるのは墳墓からの出土資料である。現在、筆者が中心となってバハレーン島の墳墓出土土器の記録・分析を進めているが、一部にシンド系の可能性をもつ資料を含むものの、大部分がグジャラート地方のソーラート・ハラッパー式土器の系統に属するもの（ここでは以下、グジャラート系土器と呼ぶ）である（図10左）（Uesugi 2019）。

このバハレーン島で出土するグジャラート系土器（「インダス系土器」と同様にグジャラート地方に由来すると考えられる土器を総称する）の編年的位置づけについてみると、後期段階のグジャラート地方で出土する土器よりも一段階新しいものと考えられ、この種の土器が出土するバハレーン島のバールバール型墳墓（後期型ともいう）に与えられている前2千年紀前葉という実年代（Højlund ed. 2007）と大きな齟齬はない。とすれば、前2千年紀前葉のどの段階かは不明ながらもインダス文明の衰退に与えられている前1900年という年代に相前後するか、あるいはそれよりも新しい時期にまでグジャラート系土器がバハレーン島で副葬品として使用されているということになる。厳密に搬入品か在地生産品かの判断は現在のところできないが、グジャラート系土器とともに出土する在地系土器（バールバール式土器）や前3千年紀末の墳墓から出土するメソポタミア系土器、ウンム・アン＝ナール系土器とは、形態・製作技法・装飾技法がまったく異なっており、搬入品の可能性が高い。いずれにせよ、グジャラート系インダス集団が前2千年紀前葉のアラビア海＝ペルシア湾交易に関わっていたことを示す資料としてきわめて重要な意味をもつ。同じ時期の墳墓から紅玉髄製ビーズが多量に出土していることも勘案すると、グジャラート系インダス集団の関与は散発的なものではなく、かなり大掛かりなものであったことが推定できる。

こうしたインダス域外におけるインダス系器物の検討は、文明社会の衰退の理解においてきわめて有効である。それがインダス域内における文明社会の衰退とどのように関わるのか議論を深める必要があるが、後期以前の段階と比べて文明社会としての構造を変容させたり、あるいは規模を縮小したりしながらも、グジャラート地方を中心に海洋交易を行う仕組みが維持されていた可能性も十分にあるだろう。インダス文明が周辺地域と広く交流関係を有していた社会であることは周知の事実であるが、研究の上においてもそうした交流関係を一つの突破口としてインダス文明社会の衰退過程を明らかにしていくことが重要である。

おわりに：インダス考古学の展望

前節までインダス文明成立から衰退に関わる諸現象について、筆者自身の研究を軸に問題点を整理してきた。問題点・課題が山積状態であることは明らかで、本項での議論も現状では十分な論証ができない可能性・仮説を提示したにすぎないが、いかにそうした状況を打破する戦略を練って研究を進めていくかがきわめて重要である。本節ではまとめとして、インダス文

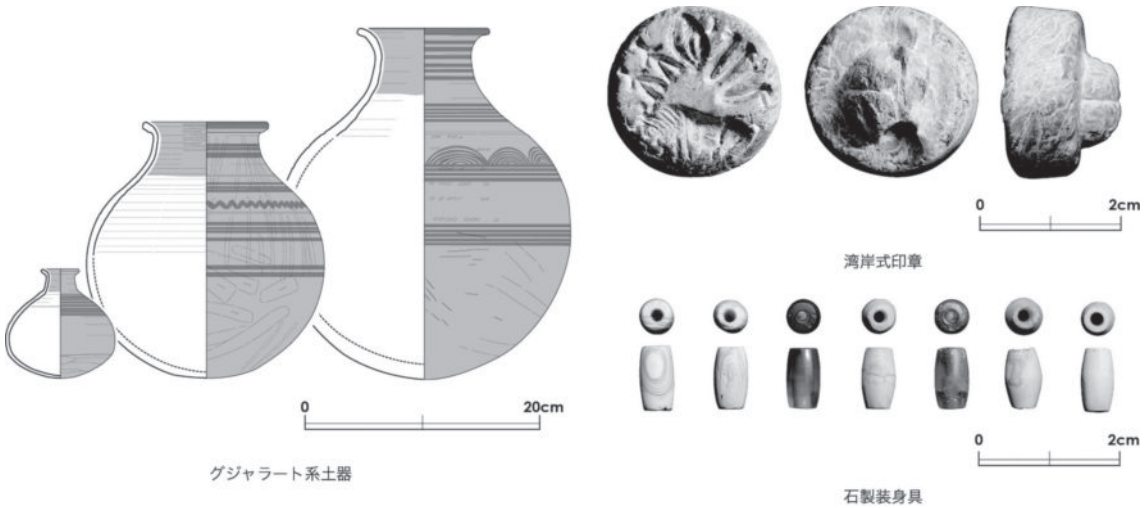

図10　バハレーン島出土のインダス系器物（BACA所蔵資料、筆者作成）

明の成立・展開・衰退という歴史的現象を理解するための視点を提示することとしたい。

まず最初に注目すべき点は、インダス文明社会は文明期以前の地域文化群の交流関係およびハラッパー文化とそうした地域文化群との関係によって成立しているという点である。先文明期後半期（前3000～前2600年頃）にコート・ディジー文化の出現によってインダス平原部を中心とする交流ネットワークが強化されるとともに周辺地域へと拡大する。この現象がインダス文明社会の基盤の中核をなしていると考えられるが、ハラッパー文化は前段階の交流ネットワークを再編・強化しており、コート・ディジー文化からハラッパー文化への移行は決して直線的ではない。このように考えると、コート・ディジー文化の出現からハラッパー文化の出現・拡散にいたる数百年間はインダス域内のみならず域外との関係においても変化が激しかった時期である可能性が高い。この前3千年紀前葉を中心とする時期のインダス地域内外の関係の詳細の解明がインダス文明社会の成立過程を理解する上できわめて重要と考えられる。

今一つ注目されるのは、ハラッパー文化と地域文化群との関係である。地域文化群の多様性に着目して、これまでインダス文明の斉一性を表徴するものとして捉えられてきたハラッパー文化を上張とみなし、文明社会の多様性を説く議論（Davis 2018; Petrie et al. 2018）が近年活発になっているが、逆にいえば多様な地域文化群を結びつけて都市社会の仕組みを誕生させる上で重要な役割を果たしたのはハラッパー文化であるということになる。より厳密にいえば、広域交流ネットワークの形成を目指すハラッパー文化とその中に取り込まれながらも各地でその命脈を保つ地域文化群の関係のあり方こそがインダス文明社会の中核をなすものということができるであろう。そうした関係性を理解するためには、ある特定の地域でハラッパー文化の要素と在地文化の要素が遺跡・地域空間の中でどのように共在しているのか詳細に分析・検討することが重要である。

その一方で、ハラッパー文化が媒介しているにしても、インダス文明社会が地域間の関係によって成り立っているのであれば、各地の様相を把握し、地域間の関係を比較・連関の視点から理解することも不可欠である。ある地域における変化が別の地域の出来事に触発されている可能性もあり、インダス地域内のある特定の地域に偏向した研究では、全体像はおろか部分の実態を見誤る危険性があろう。

グジャラート地方が前2千年紀前葉の段階までアラビア海＝ペルシア湾交易に関わっていたとすれば、他の地域よりも遅れる段階まで海洋交易を支える社会が維持されていたことになる。逆にみれば、そうしたグジャラート地方がインダス域内の他の地域とどのような関係にあったのかも注目されるところである。同様に、後期（前3千年紀後葉）の段階にクッリ式土器が西方との交流に関わっていたとすれば、バローチスターン地方の社会がその後どのように展開したのかも明らかにされる必要があろう。

このようにみてくると、インダス文明社会はさまざまな地域社会＝文化群の関係と周辺地域との関係が錯綜するきわめて高度に複雑な社会であり、時空間上でダイナミックに展開した歴史事象であるということになる。そこには多様な関係によって結ばれる社会＝文化集団の存在が垣間見られ、彼らの地域を超えた活動がインダス文明社会を支えていた可能性が考えられるし、またそうした多様な集団の関係がインダス文明社会を変容させ、最終的には衰退させた可能性も想定されるだろう。こうした社会の様相はメソポタミアなど他の文明社会においても同様であったと考えられるが、インダス文明は研究が十分に進んでいないためか、一体の社会として捉えられがちである。本稿では問題点の整理と展望の提示に終始したが、インダス考古学研究の次の100年を見通す枠組みの構築とそれを検証するための基礎データの蓄積が今更ながらに急務であることを指摘して筆を擱くこととする。

謝辞

本稿において言及したバハレーン島墳墓群出土のインダス系器物の調査にあたっては、バハレーン政府文化古物局（Bahrain Authority for Culture and Antiquities）より許可のみならずさまざまなご支援を得た。明記して感謝申し上げます。

また、本稿は新学術領域研究（研究領域提案型）「都市文明の本質：古代西アジアにおける都市の発生と変容の学際研究」の公募研究「前3千年紀におけるインダス文明とアラビア半島の交流関係に関する考古学的研究」（研究代表者：上杉彰紀、課題番号：19H05043）および金沢大学超然プロジェクト「古代文明の学際研究の世界的拠点形成」（研究代表者：河合望）の成果の一部である。

参照文献

Ahulwalia, D. 2018 Sanauli's Mysterious 'Warriors'. *Live History India*. https://www.livehistoryindia.com/cover-story/2018/12/03/sanaulis-mysterious-warriors.（2019年10月31日閲覧）

Ajithprasad, P. 2002 The Pre-Harappan Cultures of Gujarat. In S. Settar and Ravi Korisettar (eds.), *Indian Archaeology in Retrospect vol.II: Protohistory*, 129–158. New Delhi, Indian Council of Historical Research/Manohar.

Ameri, M. 2013 Regional Diversity in the Harappan World: The Evidence of the Seals. In S. A. Abraham, P. Gullapalli, T. P. Raczek and U. Z. Rizvi (eds.), *Connections and Complexity: New Approaches to the Archaeology of South Asia*, 355–374. Walnut Creek, Left Coast Press.

Barthélemy de Saizieu, B. and A. Bouquillon 1994 Steatite Working at Mehrgarh during the Neolithic and

Chalcolithic Periods: Quantitative Distribution, Characterization of Material and Manufacturing Process. In A. Parpola and P. Koskikallio (eds.), *South Asian Archaeology 1993*, 47–59. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.

Barthélemy de Saizieu, B. and A. Bouquillon 1997 Evolution of Glazed Materials from the Chalcolithic to the Indus Period Based on the Data of Mehrgarh and Nausharo. In F. Allchin and B. Allchin (eds.), *South Asian Archaeology 1995*, 63–76. Cambridge, The Ancient India and Iran Trust.

Barthélemy de Saizieu, B. and A. Bouquillon 2000 Faience Beads of the Third Millennium BC in the Indus. In M. Taddei and G. De Marco (eds.), *South Asian Archaeology 1997*, 17–33. Rome, Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente.

Bisht, R. S. 1999 Dholavira and Banawali: Two Different Paradigms of the Harappan Urbis Forma. *Purātattva* 29: 14–37.

Carter, R. A. 2001 Saar and its External Relations: New Evidence for Interaction between Bahrain and Gujarat during the Early Second Millennium BC. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 12: 183–201.

Casal, J.-M. 1964 *Fouilles d'Amri*. Paris, Librarie C. Klincksieck.

Dales, G. F. and J. M. Kenoyer 1986 *Excavations at Mohenjo Daro, Pakistan: The Pottery*. University Museum Monograph 53. Philadelphia, The University Museum.

Dangi, V., A. Uesugi, Manmohan Kumar, V. Shinde and Appu 2015 Bedwa: A Mature and Late Harappan Necropolis in the Upper Ghaggar Basin. In Manmohan Kumar and A. Uesugi (eds.), *Harappan Studies*, vol. 1, 93–152. New Delhi, Aryan Books International.

Dani, A. H. 1970–71 Excavations in the Gomal Valley. *Ancient Pakistan* 5: 1–177.

Davis, M. A. 2018 The Harappan 'Veneer' and the Forging of Urban Identity. In D. Frenez, G. M. Jamison, R. W. Law, M. Vidale and R. H. Meadow (eds.), *Walking with the Unicorn: Social Organization and Material Culture in Ancient South Asia, Jonathan Mark Kenoyer Felicitation Volume*, 145–160. Oxford, Archaeopress.

Durrani, F. A. 1988 Excavations in the Gomal Valley: Rehman Dheri Excavation Report No.1. *Ancient Pakistan* 6: 1–232.

Francfort, H.-P. 1989 *Fouilles de Shortughai: Recherches sur l'Asie Central Protohistorique*. Paris, Diffusion de Boccard.

Gadd, C. J. and S. Smith 1924 The New Links between Indian and Babylonian Civilizations. *Illustrated London News*, October 4, 1924: 614–616.

Højlund, F. (ed.) 2007 *The Burial Mounds of Bahrain: Social complexity in Early Dilmun*. Aarhus, Moesgaard Museum/Ministry of Informations, Bahrain/Jutland Archaeological Society.

Højlund, F. and H. H. Andersen (eds.) 1994 *Qala'at al-Bahrain, vol. 1: the Northern City Wall and the Islamic Fortress*. Jutland Archaeological Society Publications 30:1. Moesgaard, Jutland Archaeological Society.

Jarrige, C., J.-F. Jarrige, R. H. Meadow and G. Quivron 1995 *Mehrgarh: Field Reports 1974–1985*. Karachi, The Department of Culture and Tourism, Government of Sindh, Pakistan in collaboration with the French Ministry of Foreign Affairs.

Jenkins, P. C. 1994 Continuity and Change in the Ceramic Sequence at Harappa. In A. Parpola and P. Koskikallio (eds.), *South Asian Archaeology 1993*, 315–328. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.

Jenkins, P. C. 2000 The Pottery from Cemetery R37: Chronology and the Changing Social Structure of Harappa Society. In M. Taddei and G. De Marco (eds.), *South Asian Archaeology 1997*, 35–53. Rome, Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente.

Kenoyer, J. M. 1991a The Indus Tradition of Pakistan and Western India. *Journal of World Prehistory* 5(4): 331–385.

Kenoyer, J. M. 1991b Ornament Styles of the Indus Tradition: Evidence from Recent Excavations in Pakistan and India. *Paléorient* 17(2): 79–98.

Kenoyer, J. M. 1991c Urban Process in the Indus Tradition: A Preliminary Model from Harappa. In R. H. Meadow (ed.), *Harappa Excavations 1986–90: A Multidisciplinary Approach to Third Millennium Urbanism*, 29–60. Madison, Prehistory Press.

Kenoyer, J. M. 1997 Trade and Technology of the Indus Valley: New Insights from Harappa, Pakistan. *World Archaeology* 29(2): 262–280.

Kenoyer, J. M. 2005 Bead Technologies at Harappa, 3300–1900BC: A Comparative Summary. In C. Jarrige and V. Lefèvre (eds.), *South Asian Archaeology 2001*, 157–170. Paris, Editions Recherche sur les Civilisations.

Kenoyer, J. M. 2017 Using SEM to Study Stone Bead Technology. In A. K. Kanungo (ed.), *Stone Beads of South and Southeast Asia: Archaeology, Ethnography and Global Connections*, 409–436. Gandhinagar/New Delhi, Indian Institute of Technology, Gandhinagar/Aryan Books International.

Kenoyer, J. M. and R. H. Meadow 2010 Inscribed Objects from Harappa Excavations 1986–2007. In A. Parpola, B. M. Pande and P. Koskikallio (eds.), *Corpus of Indus Seals and Inscriptions*. vol. 3, xliv–lviii. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.

Kenoyer, J. M. and M. Vidale 1992 A New Look at Stone Drills of the Indus Valley Tradition. In P. B. Vandiver, J. R. Druzik, G. S. Wheeler and I. C. Freestone (eds.), *Materials Issues in Art and Archaeology III*, 495–518. Pittsburgh, Materials Research Society.

Khan, F. A. 1965 Excavations at Kot Diji. *Pakistan Archaeology* 2: 13–85.

Killick, R. and J. Moon (eds.) 2005 *The Early Dilmun Settlement at Saar*. London, London-Bahrain Archaeological Expedition/Institute of Archaeology, University College London.

Konasukawa, A., H. Endo and A. Uesugi 2011 Chapter 7: Minor Objects from the Settlement Area. In V. Shinde, T. Osada and Manmohan Kumar (eds.), *Excavations at Farmana, Rohtak District, Haryana, India 2006–2008*, 369–529. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.

Laursen, S. T. 2010 The Westward Transmission of Indus Valley Sealing Technology: Origin and Development

of the 'Gulf Type' Seal and Other Administrative Technologies in Early Dilmun, c. 2100–2000 BC. *Arabian Archaeology and Epigraphy* 21(2): 96–134.

Law, R. W. 2011 *Inter-Regional Interaction and Urbanism in the Ancient Indus Valley: A Geologic Provenience Study of Harappa's Rock and Mineral Assemblage*. Occasional Paper 11: Linguistics, Archaeology and the Human Past. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.

Mackay, E. J. H. 1931 Further Links between Ancient Sind, Sumer and Elsewhere. *Antiquity* 5: 459–473.

Mackay, E. J. H. 1943 *Chanhu-Daro Excavations 1935–36*. New Haven, American Oriental Society.

Majumdar, A. 1998–99 Early Harappan Settlements in North Gujarat. *Prāgdharā* 9: 15–25.

Manmohan Kumar, A. Uesugi, V. S. Shinde, V. Dangi, Vijay Kumar, Sajjan Kumar, A. K. Singh, R. Mann and Rajesh Kumar 2011 Excavations at Mitathal, District Bhiwani (Haryana) 2010–11: A Preliminary Report. *Purātattva* 41: 168–178.

Manmohan Kumar, A. Uesugi, V. Dangi, Vijay Kumar and T. Nagae 2012 Excavations at Mitathal, 2011–12. *Purātattva* 42: 148–181.

Marshall, J. H. 1931 *Mohenjo-daro and the Indus Civilization*. London, Arthur Probsthain.

Meadow, R. H. (ed.) 1991 *Harappa Excavations 1986–90: A multidisciplinary Approach to Third Millennium Urbanism*. Madison, Prehistory Press.

Mitchell, T. C. 1986 Indus and Gulf Type Seals from Ur. In Shaikha Haya Ali Al Khalifa and M. Rice (eds.), *Bahrain through the Ages: Archaeology*, 278–285. London, The Ministry of Information, State of Bahrain/KPI.

Mughal, M. R. 1970 *The Early Harappan Period in the Greater Indus Valley and Northern Baluchistan*. Unpublished Ph.D Dissertation. Philadelphia, University of Pennsylvania.

Olijdam, E. and H. David-Cuny 2018 Dilmun-Meluhhan Relations Revisited in Light of Observations on Early Dilmun Seal Production during the City IIa-c Period (c. 2050–1800 BC). In D. Frenez, G. M. Jamison, R. W. Law, M. Vidale and R. H. Meadow (eds.), *Walking with the Unicorn: Social Organization and Material Culture in Ancient South Asia, Jonathan Mark Kenoyer Felicitation Volume*, 406–432. Oxford, Archaeopress.

Petrie, C. (ed.) 2010 *Sheri Khan Tarakai and Early Village Life in the Borderlands of North-West Pakistan*. Oxford/Oakville, Oxbow Books.

Petrie, C. A., D. Parikh, A. S. Green and J. Bates 2018 Looking beneath the Veneer. Thoughts about Environmental and Cultural Diversity in the Indus Civilization. In D. Frenez, G. M. Jamison, R. W. Law, M. Vidale and R. H. Meadow (eds.), *Walking with the Unicorn: Social Organization and Material Culture in Ancient South Asia, Jonathan Mark Kenoyer Felicitation Volume*, 453–474. Oxford, Archaeopress.

Possehl, G. L. 1999 *Indus Age: The Beginnings*. New Delhi, Oxford & IBH Publishing.

Pracchia, S. 1985 Excavations of a Bronze-Age Ceramic Manufacturing Areas at Lal Shah. *East and West* 35(4): 458–468.

Quivron, G. 1994 The Pottery Sequence from 2700 to 2400 BC at Nausharo, Baluchistan. In A. Parpola and P. Koskikallio (eds.), *South Asian Archaeology 1993*, 629–644. Helsinki, Suomalainen Tiedeakatemia.

Quivron, G. 1997 Incised and Painted Marks on the Pottery of Mehrgarh and Nausharo-Baluchistan. In F. Allchin and B. Allchin (eds.), *South Asian Archaeology 1995*, 45–62. Cambridge, The Ancient India and Iran Trust.

Quivron, G. 2000 The Evolution on the Mature Indus Pottery Style in the Light of the Excavations at Nausharo, Pakistan. *East and West* 50(1–4): 147–190.

Shaffer, J. G. 1993 The Indus Valley, Baluchistan and Helmand Traditions: Neolithic Through Bronze Age. In R. Ehrich (ed.), *Chronologies in Old World Archaeology*, 3rd edition, 441–464. Chicago, University of Chicago Press.

Sharma, D. V., K. C. Nauriyal and V. N. Prabhakar 2006 Excavations at Sanauli 2005–06: A Harappan Necropolis in the Upper Ganga-Yamuna Doab. *Purātattva* 36: 166–179.

Sharma, D. V., K. C. Nauriyal, V. N. Prabhakar and Vishnu Kant 2004 Sanauli: A Late Harappan Burial Site in the Yamuna-Hindon Doab. *Purātattva* 34: 35–44.

Teramura, H. and T. Uno 2006 Spatial Analysis of Harappan Urban Settlements. *Ancient Asia* 1: 73–79.

Uesugi, A. 2011a Chapter 6: Pottery from the Settlement Area. In V. Shinde, T. Osada, and Manmohan Kumar (eds.), *Excavations at Farmana, Rohtak District, Haryana, India 2006–2008*, 168–368. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.

Uesugi, A. 2011b Chapter 9: Pottery from the Cemetery Area. In V. Shinde, T. Osada, and Manmohan Kumar (eds.), *Excavations at Farmana, Rohtak District, Haryana, India 2006–2008*, 674–800. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.

Uesugi, A. 2011c Chapter 4: Pottery. In V. Shinde, T. Osada and Manmohan Kumar (eds.), *Excavations at Girawad: Rohtak District, Haryana, India 2006*, 40–239. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature.

Uesugi, A. 2011d Development of the Inter-regional Interaction System in the Indus Valley and Beyond - A Hypothetical View towards the Formation of an Urban Society -. In T. Osada and M. Witzel (eds.), *Cultural Relations between the Indus and the Iranian Plateau during the Third Millennium BCE*, 359–380. Harvard Oriental Series Opera Minora vol. 7. Cambridge, Department of South Asian Studies, Harvard University.

Uesugi, A. 2013a A Note on the Diachronic Changes of the Harappan Pottery - A Preliminary Analysis. *Heritage: Journal of Multidisciplinary Studies in Archaeology* 1: 356–371.

Uesugi, A. 2013b Pottery from Balochistan in Ancient Orient Museum Tokyo, Part 2: Late Third Millennium BCE. *Bulletin of Ancient Orient Museum* 33: 1–74.

Uesugi, A. 2017 Ceramic Sequence in the Ghaggar Plains from Pre-Indus to Post-Urban Indus Periods. In V. Lefèvre,

A. Didier and B. Mutin (eds.), *South Asian Archaeology and Art 2012, vol. 1: Man and Environment in Prehistoric and Protohistoric South Asia - New Perspectives*, 305–330. Turnout, Brepols.

Uesugi, A. 2018a Current State of Research and Issues of Indus Archaeology Focusing on Field Researches and Material Cultural Studies. In A. Uesugi (ed.), *Current Research on Indus Archaeology*, 1–55. Osaka, Research Group for South Asian Archaeology, Archaeological Research Institute, Kansai University.

Uesugi, A. 2018b An Overview on the Iron Age in South Asia. In A. Uesugi (ed.), *Iron Age in South Asia*, 1–49. Osaka, Research Group for South Asian Archaeology, Archaeological Research Institute, Kansai University.

Uesugi, A. 2019 A Note on the Interregional Interactions between the Indus Civilization and the Arabian Peninsula during the Third Millennium BCE. In S. Nakamura, T. Adachi and M. Abe (eds.), *Decades in Deserts: Essays on Near Eastern Archaeology in honour of Sumio Fujii*, 337–355. Tokyo, Rokuichi Shobo.

Uesugi, A. and V. Dangi 2017 A Study on the Developments of the Bara Pottery in the Ghaggar Plains. In Ajit Kumar, Rajesh S. V. and Abhayan G. S. (eds.), *Kailashnath Hetu: Essays in Prehistory, Protohistory and Historical Archaeology (Festschrift to Shri. K. N. Dikshit)*, vol.1, 177–197. Delhi, New Bharatiya Book Corporation.

Uesugi, A., G. Jamison, V. Dangi and S. Nakayama 2017 A Study on the Stylistic and Technological Aspects of Indus Seals with a Focus on an Example from Bhirrana. *Heritage: Journal of Multidisciplinary Studies in Archaeology* 4: 1–17.

Uesugi, A., Manmohan Kumar and V. Dangi 2018 Indus Stone Beads in the Ghaggar Plain with a Focus on the Evidence from Farmana and Mitathal. In D. Frenez, G. M. Jamison, R. W. Law, M. Vidale and R. H. Meadow (eds.), *Walking with the Unicorn: Social Organization and Material Culture in Ancient South Asia, Jonathan Mark Kenoyer Felicitation Volume*, 568–591. Oxford, Archaeopress.

Uesugi, A. and S. Meena 2012 Chapter 6: Pottery. In J. S. Kharakwal, Y. S. Rawat and T. Osada (eds.), *Excavations at Kanmer 2005–06 - 2008–09*, 219–480. Kyoto, Indus Project, Research Institute for Humanity and Nature, Gujarat State Department of Archaeology and Institute of Rajasthan Studies, JRN Rajasthan Vidyapeeth.

Uesugi, A., I. Nakai, Manmohan Kumar, K. Yamahana, Y. Abe, J. Shirataki, K. Toyama and V. Dangi 2018 A Study on Faience Objects in the Ghaggar Plains during the Urban and Post-Urban Indus Periods. *Heritage: Journal of Multidisciplinary Studies in Archaeology* 5: 140–164.

Vidale, M. 2000 *The Archaeology of Indus Crafts - Indus Craftspeople and Why We Study Them*. Rome, IsIAO.

Wheeler, R. E. M. 1947 Harappa 1946: The Defences and Cemetery R37. *Ancient India* 3: 58–130.

Wheeler, R. E. M. 1953 *The Indus Civilization*. Cambridge, Cambridge University Press.

上杉彰紀　2009「ガッガル平原における先・原史文化の変遷」長田俊樹（編）『環境変化とインダス文明　2008 年度成果報告書』75–102 頁　総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト。

上杉彰紀　2010「先インダス文明期からポスト・インダス文明期における遺跡分布に関する覚書」長田俊樹（編）『環境変化とインダス文明　2009 年度成果報告書』113–141 頁　総合地球環境学研究所・インダスプロジェクト。

上杉彰紀　2013「ガッガル平原におけるインダス文明期の諸相―文明社会の成立と衰退―」『西アジア考古学』14 号　1–24 頁。

上杉彰紀　2015a「インダス文明期の石製装身具研究の現状と課題」『西アジア考古学』16 号　13–29 頁。

上杉彰紀　2015b「『南アジア系』石製装身具の生産と流通に関する覚書」『第 22 回ヘレニズム～イスラーム考古学研究』102–135 頁。

上杉彰紀　2017『カトーレック所蔵バローチスターンの彩文土器と土偶』カトーレック。

上杉彰紀・小茄子川歩　2008「インダス文明社会の成立と展開に関する一考察」『西アジア考古学』9 号　101–118 頁。

辛島　昇・桑山正進・小西正捷・山崎元一　1980『インダス文明―インド文明の源流をなすもの―』日本放送出版協会。

小茄子川歩　2007「インダス式印章のデザインシステム―印面に刻まれた図像の構造と変遷を手掛かりとして―」『東海史学』第 41 号　67–89 頁。

小茄子川歩　2008「都市と『伝統』の創出―彩文土器の変容からみたインダス文明の成立と展開―」『考古学研究』第 55 巻第 1 号　47–67 頁。

小茄子川歩　2013「彫刻技術に基づいたインダス式印章の分類」『オリエント』第 56 巻第 1 号　35–54 頁。

小茄子川歩　2016『インダス文明の社会構造と都市の原理』同成社。

近藤英夫　2011『インダスの考古学』同成社。

近藤英夫・上杉彰紀・小茄子川歩　2007「クッリ式土器とその意義―岡山市立オリエント美術館所蔵資料の紹介を兼ねて―」『岡山市立オリエント美術館研究紀要』21 巻　15–50 頁。